

団塊世代とそれに続く世代のセカンドライフについての意識調査

ダイジェスト版

2008年2月

特定非営利活動法人 こまき市民活動ネットワーク

調査の対象・回収結果

調査対象者	昭和22年4月2日～28年4月1日 生まれの小牧市内在住の方
抽出方法	無作為抽出
調査方法	郵送
調査数	3000人
回収数	885人
有効回答数	838人
有効回答率	27.9%

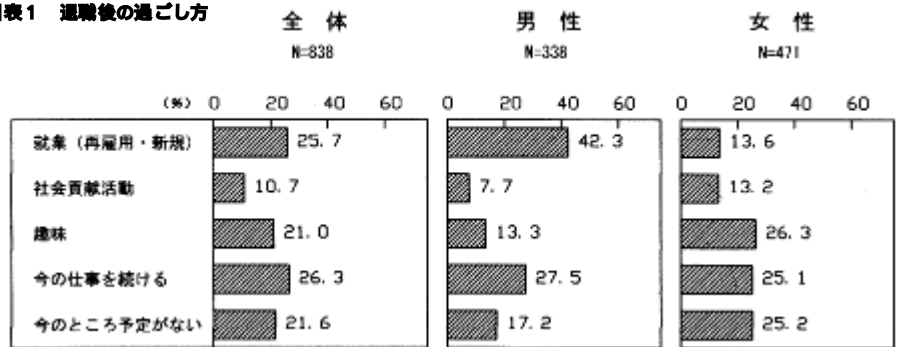
一部に重複回答があり、Nは回答者数と異なります。

団塊世代はその人口の多さゆえに、ベビーブーム、受験競争、モーレッツ社員、ニューファミリ―等々、つねに新しい時代の流れをつくってきた世代です。団塊世代が次々と定年を迎える今、そのセカンドライフの在り方が注目されています。小牧市内在住の団塊世代とそれに続く年代、年齢的には55歳～60歳を標準とするみなさんが何を考え、どのように行動しようとしているかをアンケート形式でお尋ねしました。

過半数が退職後も働くという選択

退職後の過ごし方は全体で見れば、「就業(再雇用・新規)」(25.7%)、「今の仕事を続ける」(26.7%)となり、回答者の過半数以上が働くという回答を寄せました。しかし、男性のみの数値では69.8%となり、就労の意思は女性より大きく上回ることが判りました。(図表1)

図表1 退職後の過ごし方

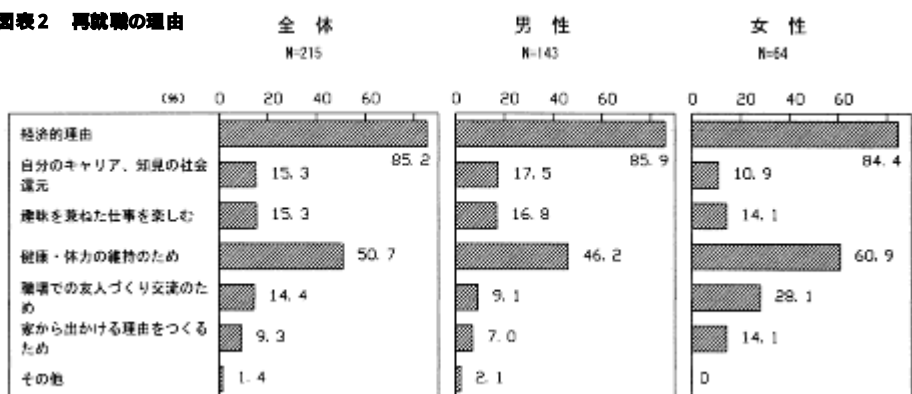


再就職は「経済的理由」が首位

就業の理由を85.2%が「経済的理由」と回答する一方、「健康・体力の維持のため」と答える人も50.7%ありました。(図表2)

(図表2)

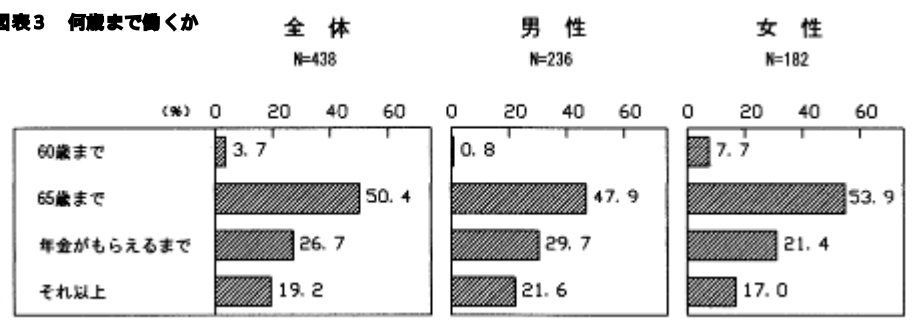
図表2 再就職の理由



過半数が「65歳まで」働きたい

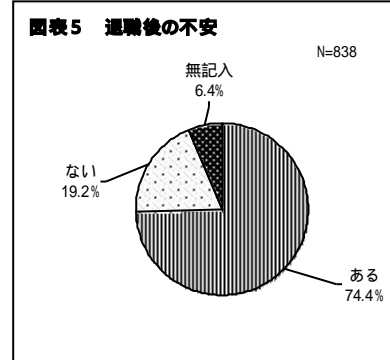
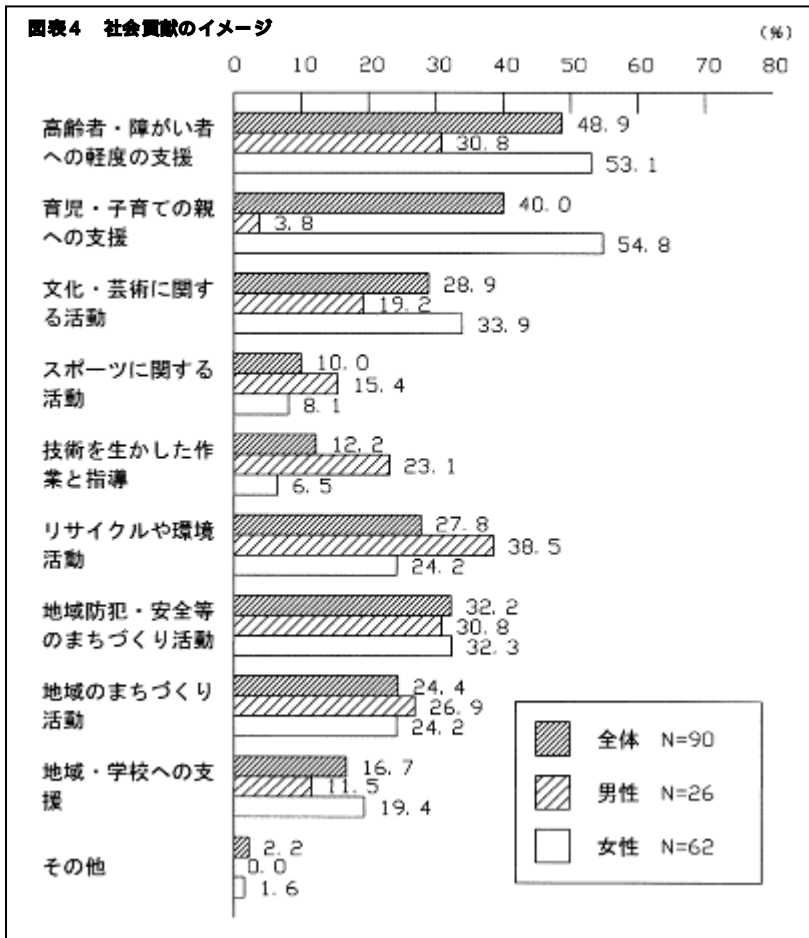
就労の目安を「65歳まで」と回答する人が過半数を超えました。また「それ以上」という回答は19.2%です。「年金をもらえるまで」は26.7%で、就労期間と年金受給の時期は深く関わっています。(図表3)

図表3 何歳まで働か



社会貢献のイメージ 1位は「高齢者・障がい者への軽度の支援」

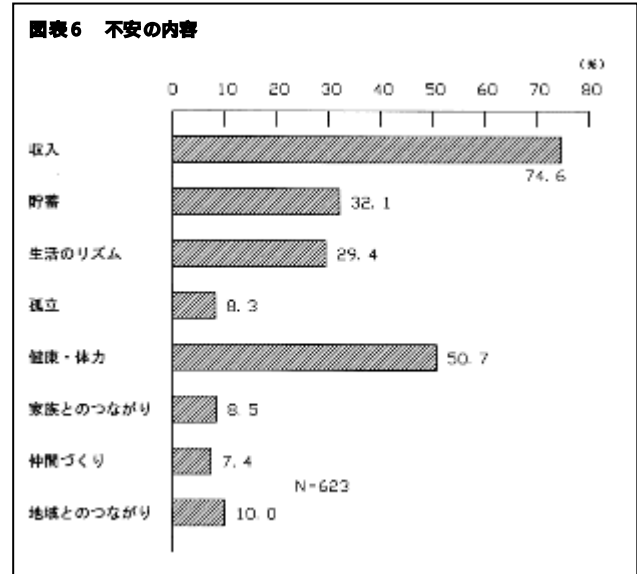
退職後の過ごし方に「社会貢献活動」を選んだ人が対象です。一見、バランスよく分散していますが、「高齢者・障がい者への軽度の支援」が全体では1位でした。(図表4)



74.4%が退職後に不安を抱く
定年後の生活に不安を感じる人は74.4%、一方、19.2%が「ない」と回答しました。(図表5)

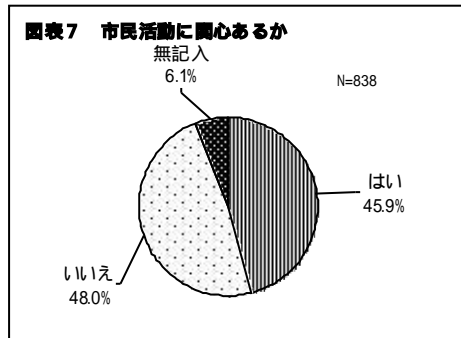
「収入」「健康・体力」に不安感

不安の内容は「収入」「健康・体力」「貯蓄」「生活のリズム」と続きます。とりわけ、「収入」に対し、不安が大きいことが判りました。(図表6)



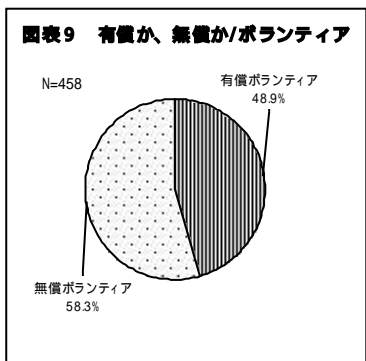
市民活動への関心は「はい」「いいえ」が折半

市民活動への関心度は「はい」と「いいえ」が折半します。(図表7)



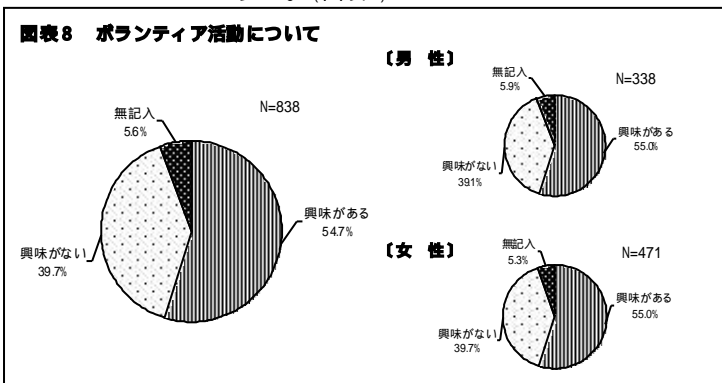
「無償ボランティア」希望が上回る

ボランティアを行う場合、「有償」「無償」のどちらを選ぶかを尋ねたところ、「無償」が9.4ポイント上回りました。(図表9)



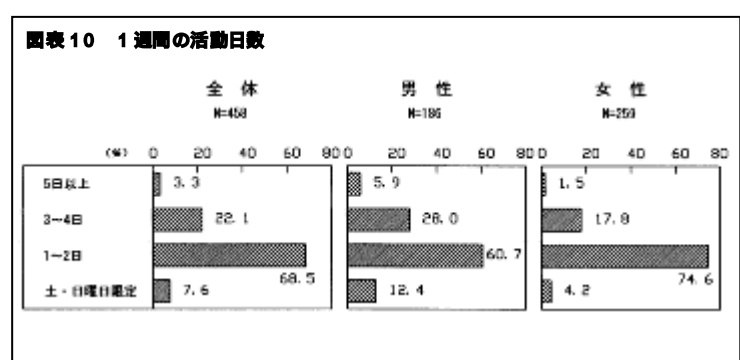
54.7%がボランティア活動に興味を持つ

ボランティア活動に対しては「興味がある」が「興味がない」を15ポイント上回りました。市民活動、NPOと聞いてもピンと来ないが、ボランティアは言葉そのものに親近感があるためでしょうか。(図表8)



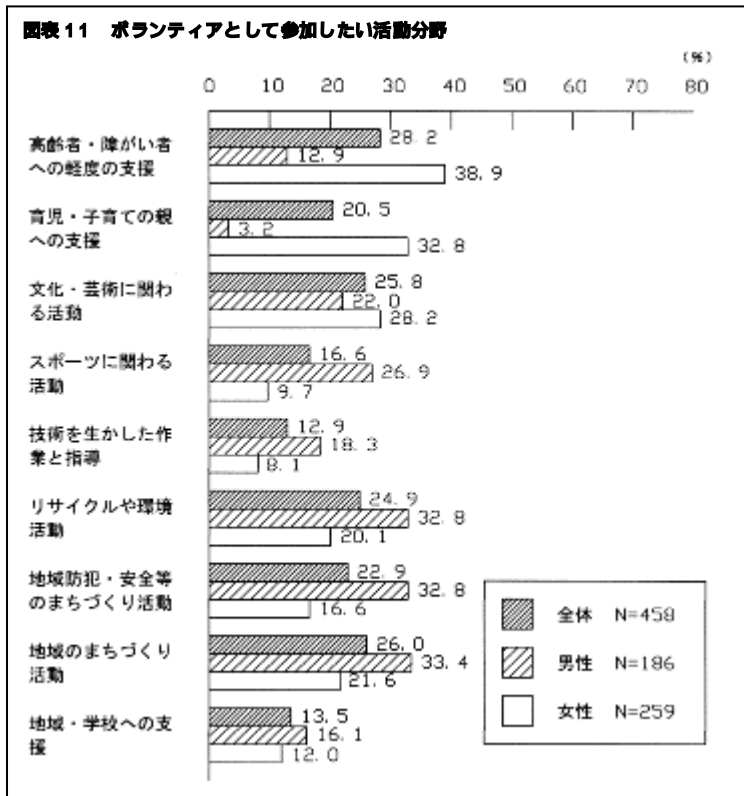
「1~2日」をボランティアに

1週間のうち、どれくらいの日数をボランティア活動に参加できるかを尋ねたところ、「1~2日」との回答がダントツで多いことが判りました。(図表10)



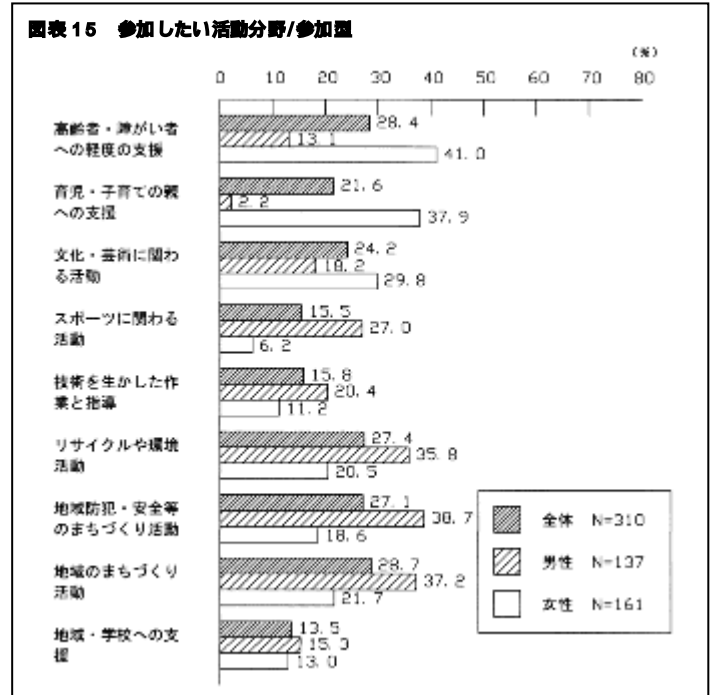
活動分野（希望）は男女差に偏り

ボランティアとして参加したい活動分野は男性と女性では偏りが見られます。女性1位の「高齢者・障がい者への軽度の支援」は男性8位に止まり、「地域のまちづくり活動」は男性の1位です。（図表11）



男性は「地域防犯・安全等のまちづくり活動」に意欲

参加したい NPO 活動について尋ねたところ、男性は「地域防犯・安全等のまちづくり活動」「地域のまちづくり活動」「リサイクルや環境活動」が上位3位を占め、一方、女性は「高齢者・障がい者への軽度の支援」「育児・子育ての親への支援」「文化・芸術に関わる活動」の順位となりました。（図表15）

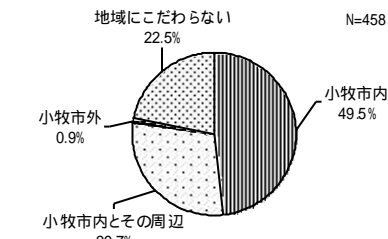


魅力ある活動なら地域を問わず

ボランティアとして活動する場合の希望地域は「市内」、「市内とその周辺」に希望が多いものの、「地域にこだわらない」との回答も22.5%ありました。（図表12）

(図表12)

図表12 活動地域/ボランティア

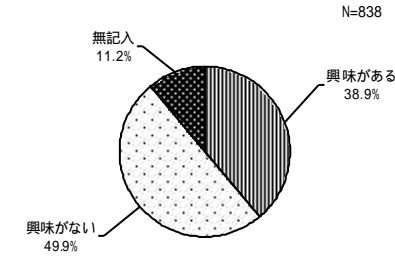


NPO 認知度は途上段階？

NPO については「興味がない」が「興味がある」を10ポイントも上回りました。マスコミ報道では何かと話題となる NPO ですが、本市で市民権を得るには時間がかかりそうです。（図表13）

(図表13)

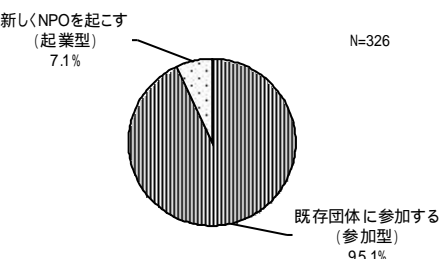
図表13 NPO について



NPO 起業を目論む人は7.1%

どのように NPO に関わりたいかとの問いに対し、95.1%の人が「既存団体に参加する」と答えています。一方、「新しく NPO を起こす」という回答も7.1%ありました。（図表14）

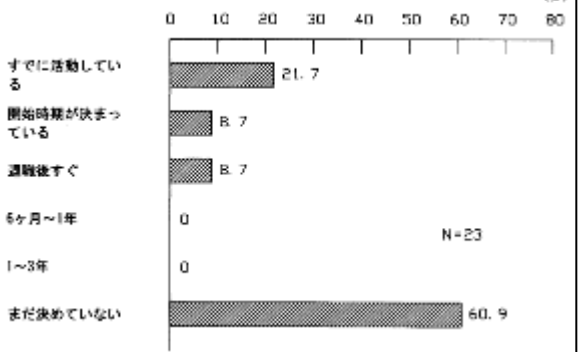
図表14 「参加型」か、「企業型」か/NPO



NPO の立ち上げはこれから

NPO を起こしたいと回答した人に活動開始の時期を尋ねました。漠然と起業を考えるものの、「まだ決めていない」との回答が60.9%を占め、具体的な動きはこれからのようです。（図表16）

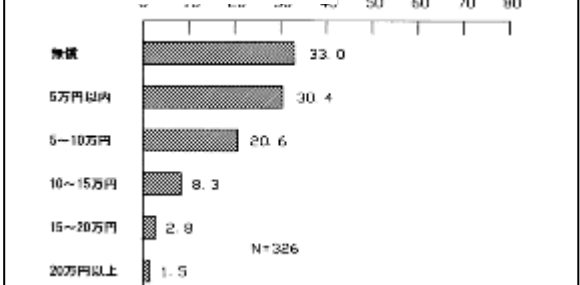
図表16 活動開始時期/起業型



希望収入10万円以下が5割

NPO 参加で得たいとする収入は至って低額です。しかも、「無償」でいいとの回答が三分の一弱。一方で「20万円以上を望む人が1.2%ありました。（図表17）

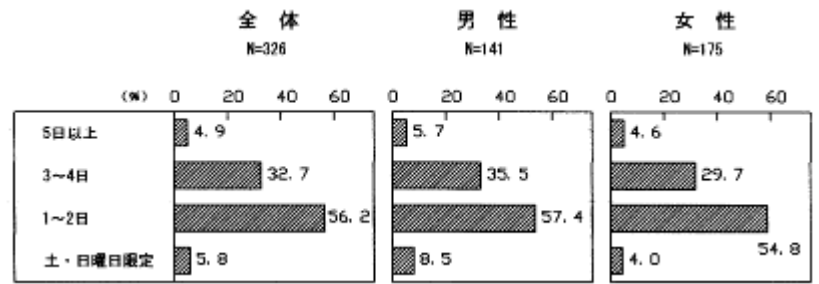
図表17 収入/NPO



1 週間のうち「1～2日」をNPOで働く

1 週間の活動日数はボランティア同様に「1～2日」とする回答が過半数強を占めます。回答者のほとんどが NPO を収入につながる就労の場と捉えていないようです。(図表 18)

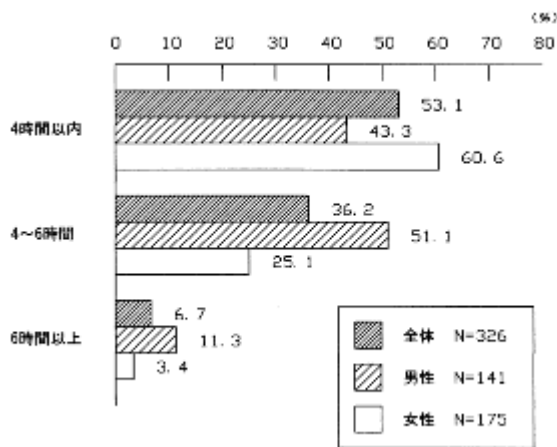
図表 18 1 週間の活動日数/NPO



男性の11.3%が1日の活動時間「6時間以上」を望む

1 日の活動時間を「4 時間以内」と考えた人が男女ともに多いようです。特に女性の 60.6% が 4 時間以内にこだわっています。一方、男性の 11.3% が「6 時間以上」を希望しています。(図表 19)

図表 19 1 日の活動時間/NPO



同意意識が起業につながる

この先、NPO における起業を目論むという回答者に具体的な内容は尋ねたところ、以下のような回答が寄せられました。

起業の内容 /NPO

- 地域の安全、小・中学生の安全と健全育成。(60 歳男性)
- アートとコレクターの媒介。(59 歳男性)
- タイヤのリサイクル。(60 歳男性)
- 安全対策の見直し。(55 歳男性)
- 障がい者の自立支援。(55 歳男性)
- 介護用品の安全性を考え、確認する。(55 歳男性)
- 行政の説明責任の足りない箇所、問題をフォローする組織づくり。(55 歳男性)
- 文化・芸術分野で「基本の基」を教える場をつくる。(60 歳女性)
- 子育て支援。安心して働くための保育所づくり。(60 歳女性)
- 介護施設等への慰問。(59 歳女性)
- 物が溢れてゴミになる一方で欲しくとも手が出ない人もいる。使える物を一ヶ所に集めて、安く供給するような場をつくる。(56 歳女性)
- 泥、水、美容、健康をつなぎ、癒しを生む。(55 歳女性)

健康でゆったり、趣味を楽しむ暮らし

セカンドライフをどう過ごしたいかを記入してもらいました。集約すれば、「健康に留意し、ゆったり、趣味を楽しむ暮らし」を希望する人が多いことが確認できました。

アンケートを終えて

図表 21 コメント概要

家庭菜園で野菜をつくり、自給自足を目指すようなスローライフ生活にあこがれる人が大半を占めます。趣味の内容が、旅行、ガーデニング・家庭菜園、油絵等の絵画、ゴルフ等のスポーツと、実に多様で、なかには趣味と実益を兼ねて収入に結びつけようとの意欲もうかがえます。

一方で、中小企業診断士の資格取得に挑戦する、パソコンの習得等、スキルアップへの意欲やチャレンジ精神の豊かさもこの世代の特徴。さらにニュージーランドで花づくりを楽しむなど、夫婦で海外でのロングステイを夢見る、また避暑・避寒を兼ねて海外に滞在したいと、視点はグローバルそのものです。国内においても長期にわたるバイクツーリングを計画する人、田舎での別荘ライフを楽しむというコメントもありました。

さらには発展途上国における技術協力、海外で日本語教師として活躍したいなど、好奇心旺盛なアクティブ派が目立つのが、この世代の特徴かも知れません。もちろん、NPO の起業を目論む人がいたり、定年後も何らかの仕事を持ち続けるという人も数多くありました。

社会貢献活動にも関心は高く、時間が許せば NPO やボランティア活動にも参加したいと考え、趣味や特技の延長線上で社会に還元できればと思っているようです。

半面、昨今の晩婚・非婚化傾向とも相まって、子どもが自立しておらず、安心してセカンドライフを楽しむ心境にない人、なかには子どもに代わって、子育てならぬ孫育てを引き受けるという人もありました。さらには離婚して生活のために一生働き続けるという女性、闘病中の配偶者を抱えている、あるいは老親の介護中という人もありました。コメントは年齢が高いほど、シビアな内容となってきます。健康に不安を抱く、介護の負担にめげる、経済問題に悩むなど、悲鳴のような声にも触れてしまいます。

忘れてならないのはリタイア後にいろいろ夢を馳せながらも、現実は一層厳しく、すべての人にバラ色のセカンドライフが待ち受けているわけではないことでした。

特定非営利活動法人 こまき市民活動ネットワーク
TEL(0568)74-4011 FAX(0568)74-4070
HP <http://www.npo-komaki.net/>

(本調査の詳細については本会 HP をご覧いただくか事務局にお問い合わせください)